第９講　ボランティアとインターン

１．ボランティアの特徴

１）日本におけるボランティア概念の定着

ボランティア volunteer 「自発的にある活動に参加する人」（デジタル大辞林）は英語である。日本語ではこれを直接言い換える語がない。だからカタカナ語として通用している。一見、ボランティアに似ているが根本的に異なる活動として、当番がある。当番は「①順に入れ代わってする仕事の、番にあたること。また、その人。②勤務の番に当たること」（同）とされる。義務であり、活動する人の自発性がない。また、奉仕は「国家・社会・目上の者などに利害を考えずにつくすこと」（同）であり、活動の内容を指しておりボランティアの場合もあれば、そうでないこともある。志願は募集や立場に対する応募であり、何も無いところでの自発とは異なる。日本語は日常の言葉遣いでも出来るだけ自分の意思を表明しないことが美徳とされており、20世紀末までボランティアという言葉も一般的ではなかった。

それを一変させたのが阪神・淡路大震災（1995.1.17）に駆けつけた災害ボランティアだった。親類縁者ではなく地縁もない人々が全国から地震後の被災地に集まり、炊き出しや後片付けを自発的におこなった。このような活動を的確に表現する言葉は日本語になく、メディアがボランティアという言葉がそのまま使い、その活動を写真や映像で伝えたことで日本にボランティア概念が定着した（教員の同時代の経験による）。その後も日本海で発生したナホトカ号原油流出事故（1997.1.2）で注目され、東日本大震災（2011.3.11）で完全に定着した。政府は1995年12月に1月17日を「防災とボランティアの日」と定めた。

「防災とボランティアの日」及び「防災とボランティア週間」について / 防災情報のページ - 内閣府

http://www.bousai.go.jp/kyoiku/volunteer/detail_kakugi.html

ナホトカ号重油流出事故の重油回収活動（毎日新聞より）
https://mainichi.jp/graphs/20181105/hpj/00m/040/002000g/4

２）ボランティア≠無償の労務提供

ここで問題となるのが、ボランティア=無償の労務提供という単純な見方である。ボランティアで思い出される活動は清掃やゴミ拾いであり、震災ボランティアを含め単純労務の無償提供という感がある。網走市が主催する「オホーツク網走マラソン」でも「ボランティア」を募集しているが、中身は学生も無償奉仕といってよい。とくに行政が財源不足を補うため、社会勉強という名目で若者に対して無償奉仕を半ば強要するのはボランティア精神の対極にある。

知床国立公園の管理団体に指定されている知床財団は、1988–2003年までは自然トピアしれとこ管理財団という名称であり、阪神・淡路大震災に先立ち当初から解説スタッフを「ボランティア・レンジャー」として募集していた。これは人件費の不足から無償労働に頼った結果であるが、参加するには事前講習を義務付け、参加にあたっては宿舎を無償提供するなど教育活動と宿泊補助を付加していた。タダ働きではない条件であった。

ボランティア活動は無償奉仕であっても自発性がよりどころとして存在する。そこを無視した強制的なタダ働きの言い換えとしてボランティアを使うことには反対である。

３）ボランティア≠欠如モデル（知識を授ける、受け取るという一方通行な関係）

ボランティア活動は人を成長させる。全体的にいえることだが教育は欠如モデル（知識を授ける、受け取るという一方通行な関係）だけ説明がつく行為ではない。ボランティアに向けた講習でも、知識の理解には受講者の主体的な組み立て、教授者との双方向のやりとりが介在し（構成主義的表現）、知識の実際の使用では主体性が発揮される。展示解説ボランティアを定型業務と考えれば、与えられた文言を繰り返すだけである。実際にはボランティアは人間であるので、聴衆との双方向のやりとり、相手に応じた知識や技術の発揮など自ら学ぶ場面もある。

４）ボランティア=無限の可能性

先にボランティアは無償の労務提供ではない、としたが無償労働は事実であり、そこに強みもある。通常の労働は賃金との等価交換である。給料に合わせて働く。ところが無償労働はそもそも賃金がない。どこまで働くのかは、その人の主体性に任される。ボランティア活動が面白く、有意義と感じた場合、労働の等価交換では極めて高額となるような結果を生む可能性もある。その意味で無償労働の可能性は無限大といえる。

博物館のボランティア的性格を持つ市民団体。次ページ参照

２．博物館とボランティア

１）博物館におけるボランティア

博物館はそれ自体では利益を生まない。博物館を支えるのは好奇心や自発性であり、ボランティア精神が支えている。博物館のボランティア活動は書類仕事から掃除や草刈などの労務提供、専門知識や特殊技能を駆使した調査研究まで幅広い。通常の事業所よりも多様な技能や能力の発揮の場でもある。そこに博物館ボランティアの面白さがある。

２）自発的な協力者

学芸員は有償労働であるが、待遇以上に働けば、その部分はボランティア活動といえる。実際、博物館での調査研究はボランティア部分、つまりタダ働きの部分が相当に含まれるのが実情となっている。たとえば休日に考えたポスターのデザインはどのように評価する（＝賃金に換算する）のかといった事案。これは３年生の博物館経営論で考える。

博物館は実際のところ職員以外の人たちからの協力で成り立っている部分も相当ある。資料の収集では、寄贈者もボランティアといえるし、調査に同行する無償の協力者や情報の提供者もそうである。市民調査もたいていは無償であるので、ボランティア活動である。これらは組織化されない、組織化されていないボランティア活動である。

３）スタッフボランティア

それに対して組織化されたボランディア活動も存在する。これをスタッフボランティアと呼ぶ。博物館のボランティアというと、こちらを思い浮かべるのが通例であろう。スタッフボランティアは登録制が通例で、事前研修が必要な場合もある。これは活動に伴う保険を掛ける都合上、あるいは、危険を伴う業務、希少種の調査など一般には周知しない内容の業務などに従事することからボランティアを特定する必要が生じ、登録制とすることも多い。スタッフボランティ

アには名称を与えることが多い。対外的な立場を明確にし、ボランティア自身も活動がしやすくなるためである。

スタッフボランティアを組織する場合、博物館に担当者が必要となる。規模や活動が広がれば担当者の仕事も増加する。そのため、博物館にとって業務量の増大からボランティアを負担と感じる場合も時にある。

４）持ちつ持たれつ

博物館とボランティアの関係は互恵的［ごけいてき：互いに利益や恩恵を与え合う］なものである。スタッフボランティアは労務提供の代わりに博物館を知り、博物館から学ぶ、博物館とは独立に組織された団体でも、博物館が活動の場を提供し、団体は成果品を博物館に還元する。持ちつ持たれつ、学芸員だけでは限りある知識や技術、人脈がボランティアをとおして広がっていく。場合によっては学芸員が博物館とは異なる立場の活動をおこなう団体といったこともある。さらに、通常、博物館の職員は定年があり、65歳以上の人員がいないことが多い。高齢者ボランティアは職員だけでは欠けてしまう世代を補充し、この世代の経験や知見、技術や、人脈を博物館にもたらす。結果、ボランティア活動は博物館が拡大拡充していくことにつながる。

休憩 1847から再開4844

３．ボランティアの事例

１）地方博物館

近隣では美幌博物館が学芸協力員をスタッフボランティアとして組織し、ジオラマなど展示資料の作成をしている。札幌ワイルドサーモンプロジェクトは共同代表３名中２人が豊平川さけ科学館の館長と学芸員、事務局も同館にあり、学芸員が博物館の枠を超えた活動を市民と一緒にボランティア活動としている。なにわホネホネ団は自己規定では「大阪市立自然史博物館を拠点に活動している骨格標本作成サークル」だが、完成した骨格標本を同館に収めるなど多分に博物館ボランティアの性格を持つ。

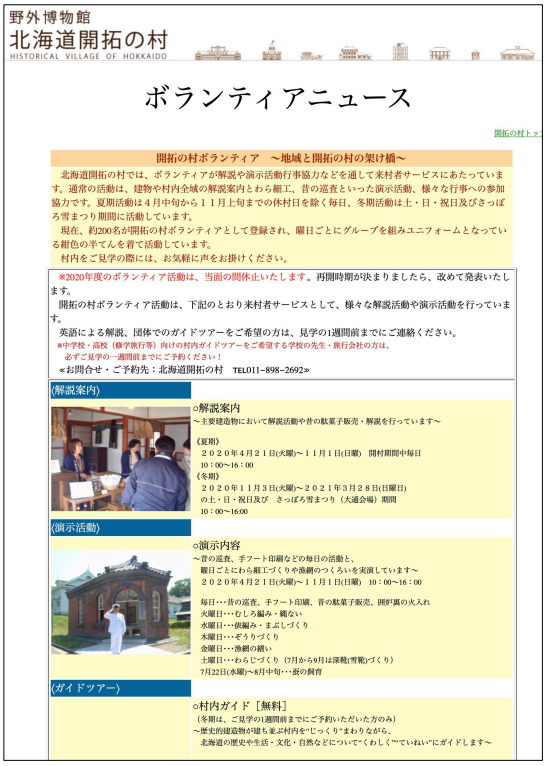
美幌博物館学芸協力員個人ページ　展示更新

http://kanazashi.blog2.fc2.com/blog-entry-667.html

SWSP札幌ワイルドサーモンプロジェクト

https://www.sapporo-wild-salmon-project.com

なにわホネホネ団　http://naniwahone.g2.xrea.com



北海道開拓の村は当初から解説にスタッフボランティアを取り入れた
コロナのためか上のページは削除されている。現在は下の案内のみ
https://www.kaitaku.or.jp/userguide/

２）道立博物館

北海道はスタッフボランティアの先進地である。

北海道立近代美術館は地方都市での教養活動への参加を求める潜在的なボランティア人材の存在を明らかにした。名称は「アルテピア」、協力会という位置付けで物品販売などの補助職員的な働きもしつつ、研修や視察など自主学習にも励んでいる。会員は1,120名、活動は多岐にわたり、事業部、広報部、売店部、解説部、資料部、研修部、特別活動部の７部がある。

北海道美術館協力会「アルテピア」付き　物品販売もするスタッフボランティア　http://www.artepia.or.jp/

同協力会の「ボランティアのページ」　https://www.artepia.or.jp/volunteer/about　kyoiku2023_9-2.pdf

北海道開拓の村は札幌市近郊の野外博物館で明治村の北海道版といえる存在。1987年のオープン以来スタッフボランティアによる解説を導入しており、現在は鰊漁家、農家、旅館などの建造物での生活再現（＝演示）が主な活動。ウェブ情報は現在のところ簡便な紹介ページのみ（再掲）　https://www.kaitaku.or.jp/userguide/

同村の中島館長の報告「高齢者の特性を活かした学習プログラム—北海道開拓の村ボランティアにみるプロフェッショナルな意識—」　http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/hokoku/h17/pdf/r1409459_02.pdf
kyoiku2023_9-3.pdf　リンク先ページも収録

４．インターン

１）インターンとボランティアや実習との違い

インターン intern を辞書で調べると「研修生」という名詞のほかに、「他動詞〈敵･捕虜など〉を抑留［収容］する」（ウィズダム英和辞典）という意味があることがわかる。じつに意味深長である。研修生という体験就業は時に強制労働に転化することがある。もとは単純労働よりも専門職に用いてきた語であり、弁護士などを目指す司法研修生や研修医、国連職員、新聞社や通信社の記者などが想起された。

現在ではインターンの語が就職活動の一環としての数日から１週間という中学生の職場体験のような短期の就労経験に使われたり、その業界への就業を目指さず大学の単位取得が目的のインターンシップなどが制度化され、英語圏や10年前の日本での用法とは違ってきている。

実習との違いは、実習が期間を限定しない作業や仕事の実地経験であるのに対し、より本格的に仕事として関わる点にある。期間も数ヶ月から半年以上の長期までのことが通例であった。

２）インターンシップ

現在の日本での用法は、短期インターンを公式な制度に取り入れたものを指すことが多い。大学の単位認定、行政による補助制度の対象、企業の職場体験など。本学でも１単位科目の実習として開講されている。博物館での適用例は2013年に博物館網走監獄で実施した１例がある。

３）事例紹介

東京国立博物館や東京国立近代美術館などの大型館から近隣の小規模博物館まで、インターン生を募集することが一般的となってきている。インターン生の募集が正規科目「博物館実習」の一部となる館園実習（１単位）と共通のこともあれば、別の場合もある。その博物館におけるインターンの意味に注意したい。

遠隔地の自治体では独自のインターンシップの制度を持ち、交通費や宿泊費の補助をおこなう場合があった。それに館園実習が該当する場合もあった。本課程の実例では奄美大島や佐渡島での館園実習が適用対象であったが、現在は両島ともに制度変更によって館園実習は対象外となっている。

インターンシップ | 東京国立近代美術館　https://www.momat.go.jp/ge/internship/

令和４年度インターンシップ生のことば-東京国立近代美術館　https://www.momat.go.jp/internship/r4-comments

学生インターン受付中 | 斜里町立知床博物館　https://shiretoko-museum.jpn.org/news/internship2023/

【レポート４】

ボランティアまたはインターンの経験を紹介する。博物館に限らない。無ければ職場体験でも可。

様式

件名：博物館教育論レポート４（４は全角）

本文：１行目：署名欄とし、学科　学籍番号［半角］　氏名（よみがな）とする。他のことは記さない

２行目：回答内容を簡潔に示すタイトルとする。他のことは記さない。１行におさめる

３行目：レポート本文は３行目から始める。文字数：200–1600字

提出先：教員のアドレス　y3uni@nodai.ac.jp

提出期限：12月13日（水）　遅れた場合も提出してください。